

2014 年度

事業報告書

2015 年 5 月 28 日

学校法人 関西文理総合学園



目次

I. 法人の概要

II. 長浜バイオ大学事業報告

【1-1】教育活動（学部）

【1-2】教育活動（大学院）

【2】研究支援活動

【3】学生生活支援活動

【4】就職支援活動

【5-1】学生募集

【5-1】高大連携推進事業活動

【6-1】学習・就業力支援活動

【6-2】長浜市内拠点活動

【7】教育・学術情報センター活動

【8】IR活動

【9】施設設備

【10】長浜バイオ大学保護者会

【11】長浜バイオ大学同窓会

【12】京都高齢者大学

I. 法人の概要

1 設置する学校・学部・学科・研究科

長浜バイオ大学	大学院	バイオサイエンス研究科
	バイオサイエンス学部	バイオサイエンス学科
		アニマルバイオサイエンス学科
		コンピュータバイオサイエンス学科

2 当該学校の入学定員・入学数および収容定員・在籍数の状況 (2014年5月1日現在)

【大学院 バイオサイエンス研究科】

○ 博士課程前期課程

入学定員	36名
入学数	27名

1～2回生の収容定員	72名
在籍数 1回生	29名
在籍数 2回生	47名
計	76名

※2013年度より入学定員30名から36名に変更

○ 博士課程後期課程

入学定員	5名
入学数	6名

1～3回生の収容定員	15名
在籍数 1回生	6名
在籍数 2回生	4名
在籍数 3回生	7名
計	17名

【バイオサイエンス学部】

● バイオサイエンス学科

入学定員	148名
編入学定員 (3年次生時)	4名
入学数	180名

1～4年次生の収容定員	600名
在籍数 1年次生	185名
在籍数 2年次生	201名
在籍数 3年次生	167名
在籍数 4年次生	174名
計	727名

※在籍者数には留年生を含む

● アニマルバイオサイエンス学科

入学定員	50名
入学数	62名

1～4年次生の収容定員	200名
在籍数 1年次生	65名
在籍数 2年次生	60名
在籍数 3年次生	54名
在籍数 4年次生	63名
計	242名

※在籍者数には留年生を含む

● コンピュータバイオサイエンス学科

入学定員	40名
入学数	50名

1～4年次生の収容定員	160名
在籍数 1年次生	54名
在籍数 2年次生	39名
在籍数 3年次生	43名
在籍数 4年次生	53名
計	189名

※在籍者数には留年生を含む

3 役員・教職員の概要 (2014年5月1日現在)

<役員> 理事 9名

監事 2名

計 11名

<教職員> 教員 68名 (教授 23名、准教授 14名、講師 10名、助教 1名、助手 20名)

職員 44名

計 112名

4 建学の理念・教育目標

本学は、前身である京都人文学園から受け継いだ、「平和とヒューマニズムを何よりも尊び、豊かな人間性と科学的合理性を兼ね備えた『行動する思考人』の育成」を教育理念としています。

5 法人の沿革

2002年12月19日 学校法人関西文理総合学園認可

2002年12月19日 長浜バイオ大学バイオサイエンス学部バイオサイエンス学科認可

2003年 4月 1日 長浜バイオ大学開学

2006年11月30日 長浜バイオ大学大学院バイオサイエンス研究科認可

2007年 3月31日 長浜バイオ大学バイオサイエンス学部完成

2007年 4月 1日 長浜バイオ大学大学院バイオサイエンス研究科開学

2009年 3月31日 長浜バイオ大学大学院バイオサイエンス研究科博士課程前期課程完成

2009年 4月 1日 長浜バイオ大学バイオサイエンス学部アニマルバイオサイエンス学科開設

長浜バイオ大学バイオサイエンス学部コンピュータバイオサイエンス学科開設

2010年 3月31日 長浜バイオ大学大学院バイオサイエンス研究科 博士課程後期課程完成

2013年 3月31日 長浜バイオ大学バイオサイエンス学部アニマルバイオサイエンス学科完成

長浜バイオ大学バイオサイエンス学部コンピュータバイオサイエンス学科完成

Ⅱ. 長浜バイオ大学事業報告

【1-1】教育活動（学部）

長浜バイオ大学では、教育の質を保証するため、ディプロマポリシー（学位授与方針—卒業までに身につけるべき能力）、カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施方針）を定め、2014年度入学生から新しく教育プログラムとしての新カリキュラムを編成した。2014年度は、新カリキュラム1年次を適用した。

また、2013年度以前入学生（2年次生、3年次生、4年次生）に対しては、現行のカリキュラムを適用し、その実施に当たっては、専門知識、技術を系統的に教授するとともに、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養することにより、長浜バイオ大学の学士にふさわしい人材の育成を図った。

1 学部卒業生数

2014年度、開学12年目、新学科設立6年目、設置した教育課程に基づき、学生の履修登録とその指導、定期試験と成績評価、進級判定、卒業判定に係る業務を行い、2015年3月21日、以下の卒業生を送り出した。

2014年度学部卒業生数	262名
バイオサイエンス学科	154名
アニマルバイオサイエンス学科	62名
コンピュータバイオサイエンス学科	46名

2 新カリキュラムの実施

2014年度教育改革の取り組みとして、学士課程教育の質保証をめざし、教育プログラムをベースとした新カリキュラムを構築し、1年目の実施を行った。

(1) 3学科の教育プログラムについて、2014年度入学生に十分な説明を行った。

① バイオサイエンス学科

「創薬・機能物質プログラム」

「環境・植物制御プログラム」

「遺伝子・細胞新機能プログラム」

② アニマルバイオサイエンス学科

「アニマルバイオサイエンスプログラム」

③ コンピュータバイオサイエンス学科

「情報生物学プログラム」

「医療情報技術プログラム」

(2) 新カリキュラム実施1年目、2014年度入学生には学部共通一般教育プログラムを中心として教養教育、基礎教育を行った。

- (3) 新カリキュラム1年次配当「自然科学基礎実験」の内容に新しい物理実験などを加え、再編成を行った。そのために必要な機器、備品を準備し、より充実した教育内容を行うことができた。
- (4) 数理系科目、英語、国語、コンピュータ、細胞生物学につき教育内容を再編成し、また、英語、実験・実習など単位数の変更を行った。旧課程履修者に混乱が生じないように1年目の移行措置を適正に履行した。

3 JABEE 認定に向けた取り組み

3学科の新カリキュラムは、JABEE 教育課程として「バイオサイエンスコース」「アニマルバイオサイエンスコース」「コンピュータバイオサイエンスコース」の3コースとして設定し、それぞれに学習・教育目標を設けると同時に、成績評価に関わる基準を明確にした。新カリキュラムは、(社)日本技術者教育認定機構予備審査の申請を行い2015年3月9日にJABEE 課程の暫定認定を受けた。2017年度本審査認定を目指すことになる。なお、本学のJABEE 履修審査基準に基づき2014年度 JABEE の教育課程履修を許可した者は、学部全体で215名となった。

4 実験動物技術者資格取得に向けた取り組み

本学は、日本実験動物協会から実験動物技術者受験資格認定校の資格を受けており、在学中に実験動物技術者認定試験を受験することができる。アニマルバイオサイエンス学科では、2012年度より実験動物技術者試験対策を行っており、2014年度も大きな成果を出すことができた。以下、年度別合格者数。

2012年度は1級1名、2級16名

2013年度は1級4名、2級26名

2014年度は1級5名、2級23名

5 語学力強化に向けた取り組み

本学の教育目標の一つとして掲げている「語学力の向上」の実現を図るため、クラス編成テストと期末テストに TOEIC テストを導入している。2014年度においても TOEIC テストの成績データを基に学力到達度別クラス編成を行い、教育効果の高い授業を行うことができた。さらに TOEIC のデータを分析することで本学英語教育の課題を発見し、教育内容の改善に繋げている。

6 主体的な学びを育成

主体的な活動を通じて自立的行動規範を身につけることを目的として、「バイオ実験夢チャレンジ」をカリキュラムに配置し1年次生から適用した。学生が主体的にバイオサイエンスを学ぶ力の育成を図った。

また、キャリア教育では、社会で生き抜いていくための力や社会に出て働くために必要となる力の育成を図っている。

7 F D活動

教員個人の教育力を高めるため、また、組織的な教育力を高めるために以下のF D活動を行った。

- (1) JABEE 委員会、教務委員会からの教育改善案を審議し、「化学工学基礎」の設置を上申した。
- (2) 大学基準協会から講師を招聘し、大学認証評価の概要、事例、変更点などについてF D研修会を行った。
- (3) 授業アンケートの実施
- (4) 関西F D連絡協議会主催のF D研修会への参加を検討
- (5) 海外F D研修（カリフォルニア・デービス校）へ参加

8 教育支援（前年度からの継続）

1年次基礎実験、2年次応用実験、3年次専門実験にTAを配置し、本学の基幹科目である実験・実習教育において教育効果の向上を図った。また、TAは大学院生への経済的支援という目的もあるが、TAとなる場合は、自らの研究活動に支障をきたすことがないように、原則、定められた制限以下になるよう配置した。

また、受講生数が多い講義科目においては、SAを導入し、教育支援を行った。

【1-2】教育活動（大学院）

2013年度 大学院のディプロマポリシー（学位授与方針）、カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施方針）を定め、博士課程における人材育成目標をより鮮明にした。

バイオサイエンス研究科博士課程前期課程では、教育・研究を通してバイオサイエンスの知識に裏打ちされた問題発見解決能力と自然に対する崇高な倫理観を持ち、社会を支え国際社会でも活躍しうる人材育成を目指している。

バイオサイエンス研究科博士課程後期課程では、バイオサイエンス分野における高度の知識と技術を習得し、人々の福祉と幸福の向上に貢献する様々な分野で指導的役割を担うことのできる高い能力を持った研究者、技術者および教育者の育成を目指している。

2014年度は、上記の方針に基づき、以下の教育を行った。

- 1 大学院開設8年目、以下の修了生を送り出した。

2014年度博士課程前期課程修了生 44名

2014 年度博士課程後期課程修了生 4 名

2 博士課程前期課程の修了要件の追加修正

2014 年度博士課程前期課程入学生より、修士課程修了にふさわしい質を保証するため、修了要件を追加した。学生に周知するとともに、新しい要件を取得できるよう教員が適切な指導を行っている。また、修了要件の一つである学会への参加を促すために、学会参加費を補助する制度を設けた。

3 研究室のHP立ち上げの取り組み

2014 年度当初、本学大学院への学外からの志願者を増やすことを目的として、研究室全てのHPを立ち上げ、公開する計画を立てたが、年度末の段階で36研究室中11研究室が公開されているだけである。全研究室で公開できるように、次年度に継続していく。

4 連携大学院の取り組み

タカラバイオ株式会社（以下、「タカラバイオ（株）」）との協定に基づく連携大学院の取り組みを継続した。タカラバイオ（株）の指導を受けた学生はいなかったが、タカラバイオ（株）の研究者2名を本学の客員教員として任用し、学部、大学院での講義を担当してもらった。

【2】研究支援活動

1 外部資金の獲得

(1) 申請書作成支援

本学教員を講師に迎え、科研費申請書作成講習会を開き、申請書の書き方の直接的指導をした。また、科研費、JSTおよび各種財団へのほとんどの申請書の内容と形式のチェックを研究推進機構事務室で行った。

2014 年度は、科学研究費 5 件、JST 2 件、厚生労働省 1 件、滋賀県 1 件、および財団 1 件の新規採択を得た。教員主導による企業との新規の共同研究・開発件数は3件であった。また、企業より1件の研究活動への寄附もあった。これらの結果、新規の採択、継続分および共同研究等による本年度の外部資金の受け入れ総額は 2 億 503 万円であった。

(2) 学内共同研究助成制度と研究助成制度の充実

学内共同研究助成4件と研究助成制度6件を採択し、研究費総額 990 万円の支援をおこない、学内研究の推進を図った。

2 外部との共同研究の推進

(1) 技術導出活動: 蛍光法による高感度ウイルス検出装置

蛍光標識抗体を混ぜるだけで、100 粒子程度のウイルス・細菌を 10 μ L 以下の検体から 5 分以内に検出できる分析装置を本学教員が開発した。この技術シーズをバイオ機器メーカーに導出した。現在、製品プロトタイプを製作、複数の公的研究機関・大学等の支援を受けて臨床研究支援等の用途での性能評価を行っている。学会や展示会での参考出品も継続的に行っており、確実に実用化に近づいている。

(2) 技術導出活動： 金属メッシュデバイスバイオセンサーの開発

世界で初めて微量物質の簡易検出を実現できる「金属メッシュデバイス」の用途開発を電子機器メーカーと共同で本学教員が進めている。この技術は、メッシュ状の微細構造を持つ金属薄膜の電磁波応答性から、付着した被検出物の有無や量を簡単に短時間で知ることができる。また、さまざまにデザイン可能なマイクロメートルオーダーの微細構造を利用し、大きさによって物質を分ける篩（ふるい）としても活用可能である。PM2.5 や癌細胞、微生物の検出と分離に威力を発揮することが期待される。現在、細胞分画用の機能材料として、当該電子機器メーカーよりビジネスモデルの構築が進められており、数年以内の実用化が見込まれている。

(3) 技術導出活動： 医薬品開発

医薬品開発テーマの研究が本学教員により進められている。JST の A-STEP 顕在化タイプに国内製薬企業と共同申請し採択され、共同研究を 2015 年 2 月より開始した。

(4) 技術導出活動：植物有効成分の定量法開発

滋賀県の企業と本学教員の共同研究である。企業が着目するハーブのある成分の分析方法の開発と、その成分を増加させる栽培法の開発を行っている。

(5) 特許

1 件の新規出願を他大学と企業との共同でおこなった。本年度は特許の登録はなかったが、2 件の特許査定を受け特許料を支払ったので、次年度に少なくとも 2 件の特許を登録できる。

3 学会開催補助事業

本事業で、以下の 2 学会を補助した。

(1) 日本遺伝学会第 86 回大会（含公開市民講座）

2014 年 9 月 17 日～20 日（497 人参加）

(2) 第 20 回ペプチドフォーラム

「生命分子・ペプチド機能に学ぶ医薬品」

2015 年 3 月 13 日（120 人参加）

これらの学会を本学で開催することを支援し、参加者と本学教員との議論が深まった。共同研究の開始の契機となることを期待している。

4 ビジネスフェア

びわ湖環境ビジネスメッセのビジネスフェアに出展した。来訪者はモノづくり企業が多く、本学のシーズと異なる分野でビジネスを行っているため、マッチングの機会は小さい。

5 地域支援

(1) 滋賀バイオ産業推進機構(SBO)

学から滋賀県企業に向けた新しいアグリビジネスの紹介、また企業から学にもむけた事業紹介をおこない、産学の連携に基づく滋賀県における新たなアグリビジネスの創出を目指している。本年度は、本学教員 2 人が講師に招かれ、本学での研究内容を企業に紹介した。本学教員は本機構の理事を務め、機構の運営でも貢献している。

(2) バイオビジネス創出研究会

本学に隣接する長浜バイオインキュベーションセンターを活動拠点として、本学のシーズ技術を基に新たなバイオ産業を長浜市に創出するために作られた会。本学教員は、この会に問い合わせられる技術相談などの解決に寄与した。

(3) 滋賀バイオプロジェクト創出サロン

滋賀バイオ産業推進機構とバイオビジネス創出研究会が共同で運営する会。本学教員が運営委員長を務めている。バイオ分野の大学シーズを地元企業に紹介し、大学と企業のマッチングを目指している。この会の特徴は、少人数でセミナーを開催し、企業人と大学教員とが密に相談できる場を提供していることである。

(4) 長浜アカデミックサポートチーム(NAST)

バイオビジネス創出研究会が立ち上げたチームで、バイオ、医療、環境等に優れた知見を有する教員9人を中心としたユニークな組織である。委員長も含め本学教員4人が参加し、長浜市での新たなバイオ産業創出に努めている。委員の高い専門性に基づき、企業からの技術相談や、企業への移転可能なシーズの提案を行っている。この会の活動については、長浜市役所から高い評価を得ている。

(5) アグリビジネスカフェ

バイオビジネス創出研究会が立ち上げた会で、最新のアグリビジネス、植物の知識の普及に努めている。今年度は本学教員が講師を務め数回にわたり農家向けに、植物に関する勉強会を開き、農家の基礎的能力の向上に努めた。

(6) 長浜バイオクラスターネットワーク

学長が会長を務める。長浜市、長浜商工会、長浜商工会議所、バイオビジネス創出研究会が運営する。定期的に運営委員会を開催し、その時点での地元企業が抱える課題、新規事業創出における問題点が提出され、支援策を検討した。本活動は地域支援の中核であり、本学教職員は技術相談などに貢献し、長浜市の産業振興に寄与した。

(7) 長浜市の造り酒屋との日本酒の共同開発

長浜市の観光企業(株)黒壁の働きかけにより、地域資源を使った地酒造りを市内の農家、造り酒屋と本学とで実施した。具体的には、浅井の農家・百匠屋が滋賀県育成の酒米品種「吟吹雪」の栽培を、木之本の富田酒造(有)が仕込みをそれぞれ担当し、本学は次の2つの活動を実施した。

- ① 富田酒造(有)は、自社の蔵付き酵母で仕込んだ日本酒も販売しているが、開発中の地酒にこの蔵付き酵母を用いることができれば、酵母も地域のものを使うことになり、よりオリジナリティの高い地酒とすることができる。そのため、本年度は本学が同社の蔵付き酵母の分離・同定を担当し、分離した酵母がいわゆる協会酵母と異なるものであることを確認した。来年度以降も継続される。
- ② 本学2年次生有志が、百匠屋での酒米の栽培と富田酒造(有)での仕込み作業に参加するとともに、作業プロセスと作り手の思いを記録した動画作品を企画・編集した。

できた地酒は、2015年1月に(株)黒壁の直営店・黒壁 AMISU から「純米吟醸 長濱」のブランドで発売された。

(8) 地元企業との植物工場での栽培法の開発

本学教員が滋賀県の企業2社(内1社は長浜市)と各々植物工場内で栽培植物の有用物質含量(ツブリナが有する脂肪代謝促進に関わる成分及び、企業が着目するあるハーブのある成分)を向上させるための栽培方法の共同研究を行った。有効成分の含量の高い作物が育てられるようになり、植物工場で栽培する作物の付加価値を向上させることに寄与した。

(9) ビワマスの餌開発 (長浜市役所継続支援事業)

長浜市の支援を受け2012年より本学教員を中心として研究を開始し、脂ののりのよいビワマスを育てる餌を開発した。動物細胞、野生型メダカと遺伝子組換えメダカを用いて、脂肪細胞を増やす効果を有する農産品副産物をスクリーニングにより見出した。そして、長浜市の養殖業者と共同でこの餌を用いてビワマスの養殖を2013

年 12 月に開始した。この餌の特徴は、現時点で利用価値のない、すなわち極めて安価な農産品副産物を餌の原料として使用することで、高価な大豆油を置き換え、安価な餌を製造できるということである。

開発した餌を用いて本年度も引き続き養殖した。開発した餌のビワマスの食味に及ぼす効果の解明のために、企業と共同開発を行いたく、本年度 6 月に大手化学会社に、また 8 月に大手食品会社に養殖場の見学も含め技術紹介をした。本餌で育てたビワマスと通常の餌で育てたビワマスを食べ比べてもらい、前者の方が脂ののりがよくおいしいという評価をえたが、共同研究までには至らなかった。次いで、養殖したビワマスの販売をめざし、11 月に長浜市の魚卸業者に本餌で育てたビワマスと通常の餌で育てたビワマスに食べ比べてもらった。この時期になると油含量(大豆油)の多い餌を通常の餌として与えていて、残念なことに両者の間に味の差は見いだされなかった。再度試食の機会をもつこととした。2013 年 12 月に養殖を開始したビワマスを 2015 年度に出荷する予定である。これにより、開発した餌にたいする市場での評価を得られる。

(10)カスミサンショウウオの保全活動（田村山生き物ネットワーク活動）

絶滅危惧種であるカスミサンショウウオが本学近くの田村山に生息している。本学、地元企業、地元自治会、小中高校生が協力して保護組織「田村山生き物ネットワーク」を立ち上げ、この種の保全活動を行っている。活動を行うなかで、種の保全のみならず、環境の保全をどう行うかを参加者が自ら考え、地域の自然環境保護に積極的にかかわるようになることを目指す。本年度は以下を実施した。

- ・「田村山生き物ネットワーク」報告会開催
(高校生・大学生・企業の取り組みの発表を含む)
- ・造成した保全用池へのこの種の定着の調査、また外敵調査
- ・田村山周辺水路の希少水生動物の調査とその調査結果の教育機関への周知、更に自然環境の保護計画策定
- ・田村山および県内のカスミサンショウウオ繁殖地の探索と遺伝子調査、それに基づく保全計画策定

(11)淡海生涯カレッジ長浜校

生涯カレッジは県・市・大学の連携のもと、18 歳以上の市民に、高度で体系的な学習の機会を提供する学習プログラムである。本学は理論講座と実験実習のプログラムを提供している。今年度は 7 回の理論学習講座を本学で開催し、本学教員 7 人がそれぞれの専門領域を生かした、ゲノム、植物、動物、医療、環境等に関する講義を行った。毎回約 40 人の社会人が出席し、バイオ分野の知識向上に寄与した。

【3】 学生生活支援活動

1 フレッシュヤーズキャンプ

新入生オリエンテーションの中で「フレッシュヤーズキャンプ」を実施した。「フレッシュヤーズキャンプ」は1泊2日の合宿形式のもので、このキャンプを実施することにより、新入生同士の交流や新入生と教員との交流の場を提供することができ、スムーズに大学生活へ入ることができた。また、実施会場として地元のホテルを利用し、プログラムの中に長浜の街散策を企画して、大学と地域社会の密着した関係も体験することができた。

2 経済的支援（奨学金・学費減免措置）

(1) 家計急変奨学金

「経済的な理由」により、学業を継続するのが困難になる学生の特別支援策として、本学は「長浜バイオ大学家計急変奨学金」制度を設けているが、2014年度は前期1名後期2名に支給した。

(2) 学内奨学金の充実・発展

大学としての独自の学生支援の必要から、学内規程にもとづく審査の上、本年も継続実施した。

①留学生対象（大学院・学部生）

(a) 入学金免除 (b) 授業料の50%減免措置 (c) 学内奨学金支給

②日本人学生対象（大学院・学部生）

(a) 入学試験による特別奨学金支給 (b) 学内奨学金支給
(c) 大学院入学金免除

(3) サポート奨学金制度

企業からの「サポーター奨学金」基金等による学内奨学金を増やす（年度内に1口50万×10口を目標）努力を行い、2014年度も経済的支援を継続・実施した。

3 表彰制度の確立

優れた研究、社会貢献をした学生を対象とする「長浜バイオ大学学生表彰要綱」を2010年度に制定し、それに基づき表彰を行っている。2014年度は7名1組の表彰を行った。

4 留学生の修学支援

「留学生修学サポートプログラム」として大学独自プログラムを実施した。支援策は、①留学生相談室の開設や留学生支援スタッフの配置②レポートや論文作成における日本人学生によるチューター制度③入学後の履修や生活面支援のピアチューターの活用④大学内や地域連携における国際交流イベント推進等である。

5 障がい者への教育支援を強化

ここ数年、相談室・学生担当を中心にメンタルヘルス面で複数の発達障がい学生への支援を実施しており、発達障がい学生本人の特性に合わせた対応が構築されてきた。2014年度においても、これまでの経験と対応を活かして関連部署の連携・協働を実施し、スムーズに学業生活に入っていけるように支援を行った。

6 学生相談への支援強化

メンタルヘルス面を中心とする学生相談者数は、相談利用者延べ数をみても増加傾向にある。また、相談内容も多様化傾向にある。一方、保護者や教職員から学生への対応のありかたの相談も増加しており、2013年度同様、学生相談室を週3日の開室とし対応した。また、教科学習上の悩みや、履修のありかた、就職関連等将来への見通しとの関連も強い為、学生担当、学生相談室、担当教員、関連他部署（教務担当、就職・キャリア担当、学習支援担当）職員、保護者等との連携を強化し、その協働で大きな成果を挙げつつある。2014年度においても、その効果的連携・協働を入学時から実施し、学生相談での支援を充実させた。

7 国際交流

2014年度は、タイ・カセサート大学からインターンシップ生として学部生4名の受け入れ、中国・東北大学からは「3+1型」学生交換協定に基づく交換留学生として学部生3名を受け入れた。この受け入れ学生に関しては、日本学生支援機構の海外留学支援制度（短期受け入れ）の採択により、滞在中の経済支援として奨学金を給付することができた。今後は、さらに積極的に2大学間との学生交流を行うことで、より共通の利益を認識し学術研究及び国際理解発展につなげることを確認した。

【4】就職支援活動

本学の就職支援は、バイオサイエンスを学ぶ単科大学として絶えず高い就職実績が課せられている。本学が年々に社会的評価を受ける就職実績を積み重ねるためには、アドミッションポリシーに則った入学者の確保、ディプロマポリシーに基づいた教育活動を通して学生の自己成長を促しながら、就職活動開始前までに学生を育成していくことが求められている。そのため、カリキュラムポリシーによる教学指導、就業力育成支援をはじめとしたキャリア教育との連携強化を図りながら、学生と企業との適切なマッチングを促進するように、3年次生後半からの就職支援は、①業界・企業研究、②就労意識の涵養、筆記試験・書類対策、③面接対策、④その他個別就職支援の4つの重点項目を中心に、とりわけ個別面談を重視して就職支援を実施した。

1 学部生・大学院生の就職決定状況と就職活動支援

学部第9期生の就職決定率は93.1%（決定者162名/希望者174名/前年度決定率91.3%）、また大学院博士課程前期課程第7期生の就職決定率は96.7%（決定者29名/希望者30名/前年度決定率88.0%）であった。就職先企業の詳細は下表参照。

求人受付数は、合計6,957件（対前年比125.1%）で、全体としては採用環境の好転が見られ、3年前と比較しておよそ倍増となっている。しかしながら、本学生の志向の強い医薬・化学・食品などの製造業の求人数は依然顕著な増加が見られないまま推移している。

学部 第9期入学生

卒業生数	244
大学院進学者	56
その他の進学者	26
就職決定者	162

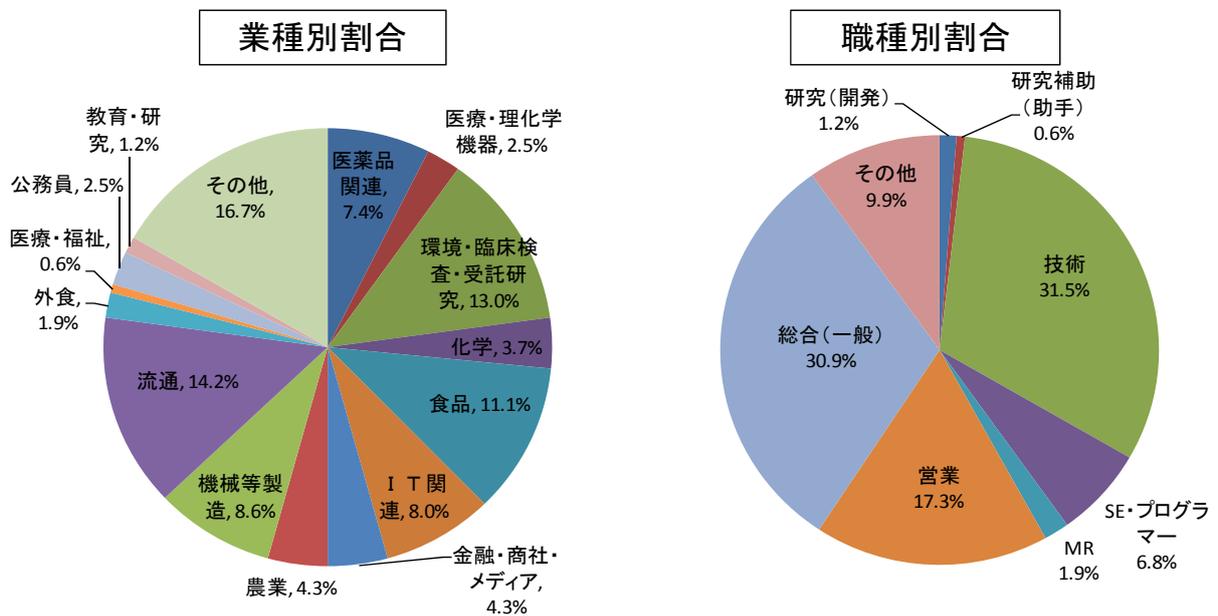
就職希望者	174	…(b)
就職決定率	93.1	…(a)/(b)

大学院博士課程前期課程 第7期入学生

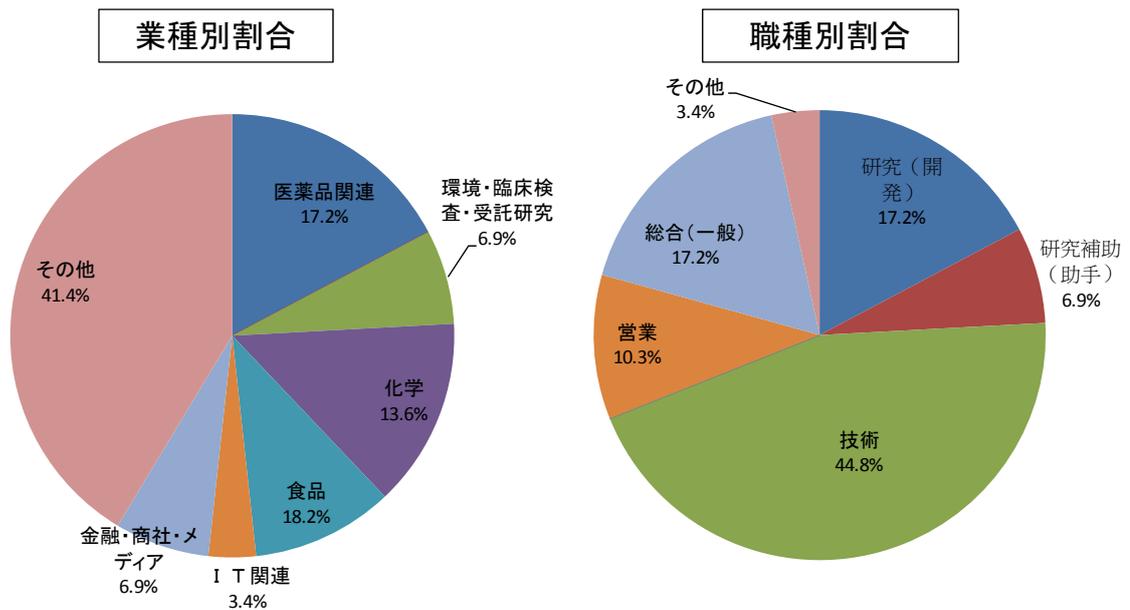
修了者数	39
大学院進学者	5
その他の進学者	5
就職決定者	29

就職希望者	30	…(b)
就職決定率	96.7	…(a)/(b)

学部第9期生の就職決定企業内訳



大学院博士課程前期課程 第7期生の就職決定企業内訳



(1) 個別面談の強化

(a) 個別面談の強化と組織的な就職支援の展開

就職・キャリア担当職員、キャリアカウンセラーとともに、各学科(コース)就職担当委員の教員と研究室指導教員が、連携協力して学生の就職支援にあたった。学生の志向の多様化により、個別支援に時間を要するケースが増えた。同時にメンタル面でのサポートを要するケースもあり、研究室指導教員や心理カウンセラーとの連携を適宜図りつつ就職支援に取り組んだ。

(1) キャリアカウンセラーの常駐相談体制

就職・キャリアサポートセンターで多くの学生の相談来室に対応するため、昨年引き続きキャリアカウンセラーの常駐体制をとった。学生の履歴書・エントリーシート相談や模擬面接をはじめとした相談支援体制は、前年と同様の体制(相談対応2名×2日/模擬面接指導対応1名×3日)で、就職・キャリア担当職員 学科・(コース)担当者との連携のもと強力な就職支援を行ってきた。

(2) スタッフ機能の強化

学生の多様なニーズに即応した就職支援を行うため、就職・キャリア担当職員のスタッフ機能を強化する目的で、職員1名をCDA(キャリア・ディベロップメント・アドバイザー)資格取得講座に派遣した。また、本学キャリアカウンセラーを講師として、面談スキルの向上研修、さらに近年の学生気質の理解を促進する職員SDも一部含んでの就活支援スキルの向上研修(8回)を行った。

2 学生ニーズの多様化に応じた就職支援

(1) 学部生・大学院生共通の就職支援

①「就活支援講座」の実施

学部3年次生および修士1年次生を対象に、特に後期には「就活支援講座」を15週連続で開講し、別途サブ講座も織り交ぜて就職活動準備を支援した。講座内容については後掲。

②企業説明会、業界講演会

学部4年次生および修士2年次生対象の学内企業説明会は、4月以降3月までの期間で延べ計30社の開催が出来、117名(延べ人数。実人数は70名)の学生が参加し、うち実人数13名が内定を獲得した。また学部3年次生および修士1年次生を対象に実施した学内<業界講演会>では昨年度と同数の16社を、学内<企業研究会>では昨年度の33社を大きく上回る48社を、各々招聘した。

③合同説明会バスツアー&合同説明会現地指導

合同説明会は、採用意欲ある企業との積極的接触の場であり、学生の応募機会を創出する目的で、合同説明会バスツアー&合同説明会現地指導を行った。参加者におい

ては合同企業説明会参加を機に就職活動が促進され、以後の内定獲得の重要な契機となった。

4月以降11月までの間、各地で実施される合同説明会へ、就職希望者を参加奨励し、チャーターバスにより引率および現地指導を行った。合説バスツアーは計3回実施した結果、延べ23名(実人数22名)の学生が参加し、うち1名が合説での接触機会を通じてその企業で内定した。

その他、有力な合同説明会については、学内就職WEB掲示板への掲出や志向地域に応じた個別案内などを通じて学生に参加奨励を行った。5月から2月までの間で、延べ55名の学生が参加し、就職・キャリア担当職員が各会場(計10箇所)で現地指導を行った。

④その他特別講座・セミナーの実施

未内定者の就職活動支援を強化するため、9月から特別講座を実施した。9月には修士2年次生向けに面接対策、応募書類作成支援の講座、10月には学部4年次生向けに企業研究、合同説明会の活用セミナー、11月には共通講座として4回シリーズの年内内定獲得講座を開催した。

⑤就活サポーターによる下級生支援

学部4年生で既に内定を獲得した学生に依頼し、就活サポーターとして11名から協力を得た。後期就活支援講座のなかで3回(11/11・18・25)にわたり「内定者の先輩の話を聞く会」を開催して下級生に対するアドバイスを行った。また、2月の学内合同企業研究会では、運営の補助とともに、参加学生へのアドバイスなどで協力を得た。

⑥就職・キャリアサポートセンターの利用促進

サポートセンターの利用方法について、スタディガイドでの掲載を整備し、就活支援講座での就職ガイダンスにおいて詳細に案内した。

(2) 学部生の就職活動支援

学部生に向けて、以下の支援講座を開催した。

【学部生向け就活支援講座】 ※は院生と共通講座			
日時	対象	テーマ	内容・ねらい
2014/7/15(火)	学部	就職ガイダンス	就職課からのガイダンス・マイナビからの情報提供(インターンシップ)。
2014/7/22(火)	学部	自己分析セミナー	夏休みにやってほしい自己分析。二人一組になったワークあり。
2014/8/19～22、 9/24・25・29・30	希望者 有料	公務員対策講座	教養試験対策(一般知識・一般知能分野)
2014/10/7(火)	学部	就職ガイダンス	2016就活スタートにあたって、本学の就職支援メニューと支援スケジュールについて
2014/10/14(火)	※	適職診断テスト(CPS-J)	受験日(大学院生は希望者のみ参加)
2014/10/21(火)	学部	業界・企業研究(1)	業界についての解説、業界・企業分析の仕方について
	学部	業界・企業研究(2)	業界についての解説、業界・企業分析の仕方について
2014/10/28(火)	学部	ビジネスマナー講座(1)	社会人になるには、なぜマナーが必要か、就活の場面で様々なマナーについて(説明会、メール、電話、送付状やお礼状など)
	学部	ビジネスマナー講座(2)	第一印象、身だしなみ、ビジネススタイルチェック、メイクアップ講習
2014/11/4(火)	学部	適職診断テスト(CPS-J)	解説日。CPS-Jの結果を就職活動にどう活かすか、ひとの特性と仕事の特性、仕事で必要とされている能力などについて
2014/11/11(火)	学部	自己分析	自己分析の必要性、自分の特徴を見つける
	学部	内定者の先輩の話を聞く会(第1弾)	3名。1人5～8分程度で就職活動の体験談を話してもらい。終了後、一旦解散し、質疑応答の時間を30分設ける(17:20～17:50)。
2014/11/18(火)	学部	職種・仕事研究(1)	品質管理・分析職・SEの仕事内容(仕事体験講座)・求められる視点などについて
	学部	内定者の先輩の話を聞く会(第2弾)	4名。1人5～8分程度で就職活動の体験談を話してもらい。終了後、一旦解散し、質疑応答の時間を30分設ける(17:20～17:50)。
2014/11/25(火)	学部	職種・仕事研究(2)	製造生産・研究補助・営業職・事務職の仕事内容・求められる視点などについて
	学部	内定者の先輩の話を聞く会(第3弾)	4名。1人5～8分程度で就職活動の体験談を話してもらい。終了後、一旦解散し、質疑応答の時間を30分設ける(17:20～17:50)。
2014/12/2(火)	学部	ES・履歴書の書き方	自己分析と自己PR、エントリーシート・履歴書の書き方
2014/12/9(火)	※	筆記試験対策(ガイダンス)	筆記試験の種類とその対策について
2014/12/16(火)	※	SPI模試	SPI試験の受験対策として
2015/1/6(火)	学部	面接対策講座	面接対策(個人面接・集団面接)と準備
2015/1/13(火)	※	筆記試験実戦対策講座	SPIを中心とした筆記試験実戦対策講座
2015/1/20(火)	※	グループディスカッション対策	グループディスカッションの考え方や想定される企業への貢献の仕方などについて。
2015/1/27(火)	学部	就職ガイダンス	今後の就職支援メニューとサポートセンターの利用について、学内企業説明会への参加の仕方など
【就活支援サブ講座】 ※は院生と共通講座			
日時	学部	テーマ	内容・ねらい
2014/11/4(火)	学部	就職サイト演習	就職サイト(マイナビ)への登録と企業検索実習
2014/12/2(火)	※	就活準備講座	「エントリーシートの書き方」について。3回連続シリーズ。
2014/12/9(火)	※	就活準備講座	各回ホームワークあり。事前にエントリーシートを提出させ、当日にフィードバック。
2014/12/16(火)	※	就活準備講座	定員は先着30名。
2015/1/20(火)	※	エントリーシート作成演習	自己PR編
2014/1/23(金)	※	就職サイト演習	大学宛求人への求人検索システム(求人NAVI)の登録と演習
2015/1/27(火)	※	エントリーシート作成演習	学生時代に最も打ち込んだこと編
2015/2/19(木)	※	エントリーシート作成演習	志望動機編
1/15・1/22・1/23	学部	SE仕事体験講座(コンピュータ学科対象)	IT企業への応募に向けて理解を深めるための講座(システムエンジニアの仕事理解と動機づけ)

(3) 大学院生の就職活動支援

大学院生は研究職、技術職への志向が強く、また企業側の期待、求められるものが自ずと高くなるため、それに応じた支援が必要となる。学部生とは別建てでの支援を強化した。

【院生向け就活支援講座】 ※は学部生と共通講座

日時	対象	テーマ	内容・ねらい
2014/7/29(火)	院生	就職ガイダンス	採用スケジュール変更に関する企業動向の最新情報、今後の就職活動支援の内容など
2014/8/19～22、 9/24・25・29・30	希望者 有料	公務員対策講座	教養試験対策(一般知識・一般知能分野)
2014/9/30(火)	院生	産業界の理解～企業研究	基本的な産業界の仕組みの理解から、先輩の就職実績企業を中心に企業研究をレクチャー、働くイメージを付ける。また実際の企業情報を元に、企業研究シミュレーションを行う
2014/10/7(火)	院生	就職ガイダンス	就職課からのガイダンス、院生として目指すべき職種等の確認、相談員との関係構築、各人の目標設定
2014/10/14(火)	※	適職診断テスト(CPS-J)	
2014/10/21(火)	院生	ビジネスマナー講座 (スーツ着用)	社会人になるには、なぜマナーが必要か、就活の場面での様々なマナーについて(説明会、メール、電話、送付状やお礼状など)第一印象、身だしなみ、ビジネススタイルチェック、メイクアップ講習
2014/10/28(火)	院生	業界・企業研究(1)	組織で働く事について確認、解説。多様な職種を理解、幅を広げられるように、研究職、技術職を中心に多様な職種を紹介。視野の広げ方、希望に合わせた具体的な応募先の選定の仕方や幅を広げて探すメリットを伝える。業界・職種・企業を探す・決めるための準備と決めたとの準備。
2014/11/4(火)	院生	業界・企業研究(2)	視野の広げ方、希望に合わせた具体的な応募先の選定の仕方や幅を広げて探すメリットを伝える。業界・職種・企業を探す・決めるための準備と決めたとの準備。
2014/11/11(火)	院生	ES・履歴書の書き方(1)	ES、履歴書に必要なエピソードの拾い出し。ES等への落とし込み
2014/11/18(火)	院生	ES・履歴書の書き方(2)	エピソード、自己PRの履歴書への落としこみ。エピソードの使い方を知る、使ってみる
2014/11/19(水) 以降、随時	院生	個別相談(全員を対象)	一連の就活支援講座の受講後、流れを受けて個別での相談を行う。不安・課題をより個人に合わせたレベルでの対応。
2014/11/25(火)	院生	グループディスカッション講座	グループディスカッション
	院生	グループワーク講座	グループワーク
2014/12/9(火)	※	筆記試験対策(ガイダンス)	筆記試験の種類とその対策について
2014/12/16(火)	※	SPI模試	SPI試験の受験対策として
2015/1/6(火)	院生	面接対策講座	個人面接対策。模擬面接を行い、個人面接での注意点や、採用者目線での面接を体感し学ぶ
2015/1/13(火)	※	筆記試験対策講座	SPIを中心とした筆記試験対策講座
2015/1/20(火)	※	グループディスカッション対策	グループディスカッションの考え方や想定される企業への貢献の仕方などについて
2015/1/27(火)	院生	就職ガイダンス	今後の就職支援メニューとサポートセンターの利用について、学内企業説明会への参加の仕方など

【就活支援サブ講座】 ※は学部生と共通講座

日時	対象	テーマ	内容・ねらい
2014/12/2(火)	※	就活準備講座	「エントリーシートの書き方」について、3回連続シリーズ。
2014/12/9(火)	※		各回ホームワークあり。事前にエントリーシートを提出させ、当日にフィードバック。
2014/12/16(火)	※		定員は先着30名。
2015/1/20(火)	※	エントリーシート作成演習	自己PR編
2015/1/23(金)	※	就職サイト演習	大学宛求人への求人検索システム(求人NAVI)の登録と演習
2015/1/27(火)	※	エントリーシート作成演習	学生時代に最も打ち込んだこと編
2015/2/19(火)	※	エントリーシート作成演習	志望動機編

(4) 留学生の就職活動支援

2015年3月卒業・修了の留学生で日本での就職を希望する者は、学部生が2名(うち過年度生1名)、大学院生が2名と少数であったので、個別支援を中心とした就職支援を行った。支援内容としては日常の求人情報提供をはじめ、留学生対象の合同企業説明会や企業見学バスツアーへの参加奨励、外国人雇用サービスセンターへの登録と利用および求人情報の検索についての支援を行った。

6月に、中小企業庁の「地域中小企業の海外人材確保・定着支援事業」と連携する形で、就活中の留学生と学部3年次生の留学生を対象に、外国人留学生の就職状況、日本の就活の流れと内容、日本の企業が求める人材像、留学生応募可の企業の探し方などを内容とするガイダンス、ビジネスマナー、個人面接会を実施した。修士生2名、学部4年次生3名、同3年次生9名の参加を得た。

進路状況については、就職希望の学部生1名、大学院生2名が内定を獲得し、最終的に院生2名が就職した。

3 企業との関係強化と求人情報の取得

(1) 求人依頼・PR活動

求人依頼件数は前年並みの約3,500件としたが、年度途中においては、本学に求人履歴のある企業を対象に求人状況調査を年間4回(4・6・8・10月)実施した。学内企業説明会の開催要望も同時に聞き取ることで、具体的な採用機会の提供にもつなげた。また各地の合同説明会での企業との情報交換と本学PRの活動、必要に応じての企業訪問による求人掘り起こしも行った。以上の情報収集によって「応募可能求人情

報」を抽出して、学内ホームページでの就職WEB掲示板への掲出、また冊子を作成・配布することを通じて、適宜学生へ情報提供を行うとともに応募奨励した。

(2) 固有のニーズに即応した求人開拓

本学生の就職志向の強い業界の企業に対し、就職・キャリア担当スタッフと指導教員が同行して訪問を行った。また、採用スケジュールの変更となる2016卒生採用に関して、外部団体が主催する大学就職担当者と企業との情報交換会に積極的に参加し、情報収集に取り組んだ。

4 公務員試験対策

(1) 公務員対策講座

2015年3月卒業生での公務員試験合格者は4名(前年比4名減。内訳：警察2名、自衛隊2名)であった。2016年卒向けの公務員試験対策講座は、教養試験対策に絞って8月に一般知能対策の4日間(8月19・20・21・22日で20時間)、9月に一般知識対策の4日間(9月24・25・29・30日で17.5時間と模擬試験)で、これまで8日通し受講であったものを分割受講可とした。延べ受講者数18名(2年次生1名を含む)で、前年14名から増加した。また教養試験対策の夏期の講座からの応用編として一般知能分野の演習講座を3月に計3日間(3月26・27・30日、15時間)開講し、対策強化をはかった。受講生は17名(前年は11名)であった。

(2) 公務員ガイダンス

6月に公務員に関するガイダンスを開催した。公務員の種類と仕事、採用試験の概要と試験対策のガイダンスに加え、今年度は長浜市役所、滋賀県警へ実際の業務や状況についての講演を依頼、内容を充実させた。

(3) 公務員試験資料の整備、強化

過去の試験問題の入手、サポートセンターでの閲覧用資料や問題集の整備、公務員試験日程の速報提供など、提供資料の充実をはかった。

5 保護者(会)との連携

保護者会との連携協力のもと、就職支援にも取り組んだ。具体的には、保護者会総会でのご協力をお願いの他、以下のことに取り組んだ。

(1) 保護者(会)との連携

6月の保護者会において、就職をテーマとする分科会を開催し、本学での就職状況や支援、家庭での就活生との接し方、現在の就職活動の特徴などについて懇談した。

(2) 保護者向け就職パンフレットの作成

新入生の保護者に対し、本学のキャリア形成支援と就職支援に理解と協力を得ることを目的に、入学式後に「本学学生の内定状況と就業力育成支援」を作成・配布(学内で作成)の上説明を行った。

(3) 広報誌「めいこう」で就職支援状況を周知

昨年同様、本学広報誌「めいこう」において、学生の就職状況ならびに本学の就職支援について、必要なメッセージを発信した。

(4) その他、保護者へのメッセージ発信

学部3年次生の前期成績票送付の際に、2016卒生から変更となる採用活動スケジュールの変更のあらましと留意点、それに向けての本学の支援の考え方などを書面で案内した。

6 学外諸団体との緊密な連携

ハローワークとの連携による就職支援は、4月より通年で、長浜ハローワークから相談員の派遣(隔週火曜午後)を受けて、ハローワークへの登録手続きはじめ、ハローワークでの求人情報の検索や紹介、また既卒生に対する就職支援などの有効な支援を実施した。

7 インターンシップ実習について

(1) インターンシップ実習の参加状況

学内では教職員によるインターンシップ実行委員会を組織し、引き続き学外団体(コンソーシアム京都、岐阜県インターンシップ推進協議会等)との連携も図りつつ、4月に2回インターンシップ実習ガイダンスを開催し、学生の参加奨励を行った。インターンシップ実習の参加者数は〈本学協定型〉での参加が50名、岐阜県インターンシップ推進協議会関係で3名、その他福井県などの関係で4名と、前年を上回った。2016卒生からの採用スケジュール変更を背景に、就職情報会社が運営するインターンシップが活発となっており、学生のインターンシップ実習に対する関心が高くなっていることが要因と思われる。

(2) 実習プログラムと受入先企業への依頼

インターンシップ実習は、就労体験に様々な意味づけを行うため、出願・選考マッチング、事前学習、実習、事後学習などの一連のプログラムで実施した。殊に、選考マッチングでの個別面談、事前・事後学習でのグループワークにより、学生の到達度に即応した指導を行った。実習受入先企業は、計23事業所であり、学生の出身地域にも考慮しながら応募者増に対応して受入先企業への増員要請などを行った。

(3) 今後の課題

インターンシップ実習の量的・質的な維持をはかるとともに、今般のインターンシップをめぐる状況の変化を受けて、実習のあり方を検討していく必要がある。

【5-1】 学生募集

長浜バイオ大学では、アドミッションポリシー(入学者受入れ方針)を定め、多様な入試方式を設定し、理科が好きでバイオサイエンスおよびバイオテクノロジーを学び、社会の役に立ちたいという意欲ある学生を募集した。

1 全体の入試結果

2014年度は新課程入試への不安感の高まりを背景とした確実な受験志向(現役生の浪人回避)の高まりがあり入試結果からも解るように志願者受験者が増加し倍率も上昇した入試であった。2015年度は、18歳人口が前年に比べ約2万人増加する年であったが志願者の対前年指数はほぼ横ばいであった。背景として現役生は増加したが、既卒生の減少で全体の受験生増加にいたらなかった。新課程初年度の大学入試センター試験は、全体平均点がアップしたが、「数学Ⅱ・B」と、理科専門科目の「化学」と「生物」が難化したことで理系受験生の得点が抑えられた結果、大学入試センター試験利用入試が敬遠された。また、就職状況の好転を背景として文系学部が回復し、この間続いた「文低理高」傾向に歯止めがかかり、理系学部の志願者は頭打ちとなり、特に薬学・理学系での志願者減少が顕著というのも例年にない特徴であった。

2 本学の入試結果

- (1) 指定校特別推薦入試は、推薦依頼対象校を拡大することで新たに推薦いただく高校が増えたが高校数は前年同数となった。例年複数推薦いただく滋賀県内高校からの推薦者数が減ったことで受験者数は減少となった。また、コンピュータバイオサイエンス学科については、独自のパンフを作成し、推薦依頼対象校を全国に広げて募集したが推薦者の増には繋がらなかった。
- (2) AO(実験・実習評価型)入試は、コンピュータバイオサイエンス学科の実習課題をより受験生に身近で事前対策し易いものに工夫・募集したが、受験者を出す事は出来なかった。全体受験者数も他の2学科で減少したため対前年比68%となった。
- (3) 一般公募制推薦入試は、11月に実施していた従来の2方式判定制度とは別日で自己推薦型入試を新規導入し、新たな受験者層の掘り起こしに繋がった。11月の試験では2日間連続実施から複数日で受験しやすい別日入試として実施したが、受験者の拡大に繋げることができなかった。
- (4) 一般入試志願者は、対前年比80%、大学入試センター試験利用入試志願者は対前年比71%となった。「文低理高」傾向に歯止めがかかり理系学部の志願者は頭打ちとなったこともあるが、第一希望学科への絞り込みによる併願学科数が減少した。やはり近隣で新設された龍谷大(農学部)が大きく影響した。一般入試中期では「理科重視型」方式を新たに実施した事で前年比92%と小幅な減少に留めることができた。大学入試センター試験利用入試は新課程初年度入試の不安感から出願締切日が試験実施前となる方式の出願は抑制された。また数学と理科の平均点が低くなりセンター利用方式の出願は減少した。

インターネット出願を一般入試から新たに導入し、受験生への利便性と割引による検定料の負担を軽減し出願促進を行った。志願者の減少となったが出願の促進は図れ減少の抑制は図れたと思われる。出願書類受付からはじまる入試業務の作業工程をいくつか軽減できたことも大きく、システムトラブルもなく無事実施することができた。(郵送出願 25%、インターネット出願 75%)

- (5) 学部全体の入試結果として、志願者総数は前年比 79% であったが女子占有率は 32% (昨年 28%) とアップし、特にアニマルバイオサイエンス学科は、3 学科のなかで志願者、入学者とも一番高い女子占有率となった。また、全体として合格者数を増加させたにも関わらず、一般入試前期・中期の倍率を大きく下げることなく、最終入学者は学部全体 283 名を確保することが出来た。
- (6) 大学院入試については、博士前期課程の本学学部生の学内進学者を対象とした入試や一般入試、特別推薦、社会人入試、外国人留学生特別入試を実施し募集定員を上回る結果となった。特に学内生に対し低年次から大学院進学説明会を開催し、進学・研究への学習意欲を高めた。博士後期課程は、学内進学者が順調に研究をすすめ募集定員を上回る結果となった。

(資料①「2015 年度入学者統計資料」)

3 募集広報

- (1) 資料請求者数は 2012 年度から 2013 年度にかけて対前年比 104% と増加したが 2013 年度から 2014 年度にかけては有力広報媒体からの請求数の減少もあり対前年比 95% となった。1 月の請求数は一般入試から導入したインターネット出願の願書請求への抑制に繋がって対前年比 81% と減少した。男女別では男性の減少が女性より大きく、学年別では既卒生からの減少が大きくなった。高校生からのアクセスや資料請求者数増加、情報発信強化のため携帯端末(スマートフォン)対応用に本学ホームページをリニューアルした。
- (2) 夏のオープンキャンパスは参加者の満足度は両日とも 80% を超えており、特に実験実習を体験するメインプログラムは、全プログラムの中でも満足度が高く 75% の高さを維持できた。学年別では 3 年生の参加者数が最も多く、台風の影響にも関わらず滋賀県の参加者数は増加した。10 月開催のオープンキャンパスは、新たに導入した一般公募制推薦入試(自己推薦型)C の対策として有名予備校の講師を迎え、小論文対策講座を開催し好評を得た。
- (3) 高校ガイダンスは高校生と直接接触できる機会であり、受験者・入学者実績を優先し参加しているが本学通学圏内の高等学校からの依頼については実績が無くとも積極的に参加した。今年度の実施回数は 73 校(昨年度 74 校)で参加人数は 520 名(昨年度 430 名)と 1 校当たりの受講者数は 7.1 人(昨年度 5.8 人)となり高校生に本学・バイオ生命科学分野への認知度を高める事ができた。留学生対象の実施回数は 9 校(昨年度 8 校)で参加人数は 50 名(昨年度 15 名)と増加することができた。他に地域貢献や本学認知度向上を目的に地域団体や高等学校からの来学型による大学説明・施設見学、模擬授業にも対応した。
- ・米原公民館「米原をもっと知ろう一日遠足」(6/17・22 名)

- ・岐阜県立大垣養老高等学校 PTA・大学見学(6/27・33名)
 - ・長浜市小中学校理科担当教員研修(8/27・41名)
 - ・滋賀県立水口高等学校1年生生理系クラス・大学見学(9/24・22名)
 - ・滋賀県立草津高等学校1年生・大学見学(10/23・12名)
 - ・滋賀県立石部高等学校2年生・大学見学(11/19・13名)
 - ・京都高齢者大学「大学見学・黒田官兵衛博覧会バスツアー」(11/28・40名)
 - ・長浜市「大学連携による科学講座モデル事業」(12/9・27名)
 - ・彦根ボランティアガイド協会・大学見学(12/10・15名)
 - ・敦賀商工会議所工業部会 ・大学見学(12/11・11名)
 - ・滋賀県立甲南高等学校1年生・大学見学(12/12・41名)
 - ・長浜公民館 土曜学び座・大学見学・模擬授業(12/20・80名)
- (4) 高校訪問は大学案内の完成後6月～7月にかけて355校、願書が完成する9月から11月に256校とアドミッションセンターを中心に他職員の協力を得て、年間のべ611校(昨年度のべ621校)を訪問した。本学在籍生の学修状況報告を柱にして、入試情報の提供と高校からの要望や受験生志望動向等の情報収集を行った。8月には学生担当が中心となり京都大阪の日本語学校へ在籍生の報告のため訪問した。
- (5) 本学主催の高校教員対象大学説明会は、学部説明や入試・進路状況と就業力育成支援での学生発表に加え3学科別の説明とし2015年度4月からスタートした「臨床検査学PG」の説明を加え本学の教育PGの理解を深めていただくために開催した。本学の説明会にはじめて参加する高等学校もあり、20校21名の参加があった。

【5-1】 高大連携推進事業活動

1 事業の全体結果

毎年増加している高校からの教育連携要請により多く応えていくため、連携事業担当者を増員し、2014年度連携事業の全受講者は延べ4,430名(前年:延べ4,237名)となった。2015年度入試・募集においては、連携講座を実施した高等学校と模擬授業等に派遣した高等学校から60名の入学者があった。

2 各事業の内容及び結果

- (1) 中高生対象の教育連携事業については、入学実績を基に実施校を精査しつつ、滋賀県湖北地域及び岐阜県を中心として高大連携事業を展開した。その結果、出張型連携講座は65回(20校・延べ1,700名が受講)、来学型連携講座は38回(12校・延べ1,316名が受講)と、前年度の受講者数(3,455名)より減少したものの、新たに岐阜県で2校を開拓するなど、東海地区の受験者増に貢献することができた。

また、課題研究支援として、滋賀県立虎姫高等学校科学探究部、岐阜県立岐山高等学校生物部、岐阜県立岐阜農林高等学校に対して研究支援を行い、高大連携事業の幅を広

げることが出来た。さらに、華頂女子中学高等学校での「総合華頂探求」の授業(2014年4月から2015年2月)実施については、前年度の講座に加え、3年生対象の講座を1年間にわたり実施しただけでなく、実験講座も行うことができ、生命科学への関心と理解を一層深めることができた。

- (2) 協定校との連携事業については、滋賀県立虎姫高等学校とは従来から実施してきた高大連携講座「ウィンターセミナー」などに加え、課題研究中間発表会へ参加し、高校との連携関係をさらに発展させることができた。また、岐阜県立岐阜農林高等学校とは、生物工学科の全学年と動物科学科の一部生徒で実施してきた連携講座を、動物科学科・全学年を対象として実施するよう拡張することで、高校との連携関係をさらに発展させた。滋賀県私立近江兄弟社高等学校とは、高校1年生を対象とした講座を開講し、高校教員とより協同しながら、前年度に行った生徒同士によるグループディスカッション及び口頭発表をさらに深化させ、生徒への理解度を高めた講座を実施するなど、新学習指導要領の趣旨を生かす授業実施に取り組んだ。
- (3) 小学生対象の教育事業について、以前より実施している「夏休み子供科学教室」(120名受講)及び京都府教育委員会事業「子供の知的好奇心をくすぐる体験講座」(3校・180名が受講)に加え、2014年度長浜市事業「大学連携による科学講座モデル事業」による長浜市立塩津小学校・5年生及び6年生を対象とする講座(27名が受講)を実施した。
- (4) 教員対象研修事業として、京都府私立中学高等学校理科研究会(11名が受講)、2014(平成26)年度長浜市事業「大学連携による科学講座モデル事業」による長浜市内小中学校理科教員研修(41名が受講)、滋賀県総合教育センターから依頼された教員研修会(154名が受講)を実施し、多くの理科教諭に生命科学等への関心を伝えることができた。
- (5) 業者主催の高校出張型模擬授業及び高校内ガイダンスについては、入試担当との強力な連携のもと、学部学科説明会及び職業理解講座等の高校内ガイダンスを積極的に実施した結果、模擬授業及び模擬実験は24回(486名が受講)、高校内ガイダンスは38回(371名が受講)と、前年度(60回・752名)より多く実施することができた。
- (6) 外部資金への応募と実施では、(独)科学技術振興機構「サイエンスキャンプ」に採択され、本学教員(3名)による講座「長浜から臨むバイオの世界」を実施し、全国より20名の高校生が講座を受講した。
- (7) 京都 CAMPUS 河原町学舎活用での事業については、既存の実験施設を利用した講座を実施しており、2014年度は京都府教育委員会・府立高校活性化プランによる京都府立北嵯峨高等学校との連携講座(3日間)及び独立行政法人科学技術振興機構サイエンス・パートナーシップ・プログラムによる京都光華高等学校との実験講座(5日間)を実施した。

3 高大連携事業に関する連携協定締結の推進

今年度は、教育連携事業の実施依頼高校は拡がり、事業内容も深まってきてはいるが、本学と高等学校との継続的に連携事業をすすめるための連携協定の締結には至らなかつ

た。

【6-1】学習・就業力支援活動

1 平成 24 年度文部科学省「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」

【テーマA】教育改善・充実体制整備(以下、【テーマA】と略す)

事業名「滋京奈地区を中心とした地域社会の発展を担う人材育成」

3 年間の補助期間の最終年度となる 2014 年度は、滋京奈地区の 16 大学と産業界 10 団体が「滋京奈地域産学協働連携協議会」のもと、地域社会の発展を担う人材育成に向けた教育の改善・充実機能を図るとともに次年度以降の事業の継続について協議した。本学はテーマ部会 B「PBL を契機とした主体的な学びの確立」に所属し、リーダー校として連携活動を推進した。

(1) 滋京奈地域産学協働連携協議会、テーマ部会への参加

①10 月に部会活動および補助期間終了後の継続体制について協議する会議、3 月に各大学の取組みを相互評価し、連携事業を最終評価する会議に参加した。2 回の会議を通して、テーマ部会や個別大学が取組む教育等の内容を産業界により一層理解を深めていただくとともに、産学・学学の連携による教育改善等を図ることができた。

②PBL 部会では4回の会議を開催し、昨年度までの成果を踏まえ、引き続きPBLの実施に関する「運営」と「設計」の2つの観点から各大学で抱える課題を整理・共有し、改善にむけた議論をおこなった。部会での議論を踏まえ、プログラムの特性に応じて具体的な改善策を設定した。連携大学がおこなう PBL 成果発表会等に参加し、個々の取組内容に対して意見交換をおこなった。また、リーダー校として、6回開催されたテーマ部会リーダー校会議に参加し、部会活動の取組、成果や課題を共有することで部会活動の活性化に貢献した。

③12月の第2回連携フォーラムで、「日本におけるインターンシップの特質を考える」をメインテーマとして、基調講演やパネルディスカッション、インターンシップ受講生発表、個別大学のポスターセッションを行った。担当部署に加え就職担当職員も参加し、他大学や産業界の参加者との情報交換を行った。

(2) 湖東・湖北四大学による連携事業

滋賀県湖東湖北地域の滋賀大学、滋賀県立大学、聖泉大学、本学の4大学が連携して、6月に社会人と学生が交流する合宿を、10月に教職員対象のフォーラムを開催した。企画運営を4大学教職員の協働でおこない、大学間の連携体制が強化された。また、交流プログラムに参加した学生は、多様な背景をもつ人材とともに働くための心構えについて、理解を深めることができた。

(3) 外部評価委員会による事業評価

地元経済界の委員による外部評価委員会を開催した。取組担当教員の他、学長・事務局長も出席し、取組全体の評価と提言を受け、改善のための意見交換をおこなった。次年度のキャリア科目の授業計画についても提言を受けることができた。

(4) プロジェクト型科目の成果発表会開催

長浜商工会議所の協力を得て、地域住民や連携先団体の方を招いた成果発表会を2月に開催した。今年度は成果発表会の運営を学生が主体的におこなった。連携2校から視察があり、本学も他校のPBL報告会を視察して、意見交換をおこなった。

(5) ウェブサイト、パンフレット等を通じた広報活動

滋京奈地域産学協働連携協議会専用のWebサイトにおいて、協議会活動、テーマ部会活動、各大学の取組成果等をまとめた報告書を公表した。

(6) 就業力評価方法の検討、教育効果の検証

1年次生から3年次生を対象に「PROG」テストを4月に実施し、「リテラシー」「コンピテンシー」の観点から基礎力を測定した。継続して実施することにより、前年度にPBL型科目を受講した学生と未受講の学生にわけて結果を比較し、効果を検証することができた。

2 平成26年度文部科学省「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」【テーマB】インターンシップ等の取組拡大(以下、【テーマB】と略す)

事業名「滋京奈地域における産学連携インターンシップ等による人材育成」

2014年度から2年間の補助事業である【テーマB】に、連携校11大学とともに「滋京奈地域における産学連携インターンシップ等による人材育成」の取組を申請し、採択された。この取組みは、【テーマA】での取組成果を活かして、「滋京奈地域インターンシップ推進協議会」のもとに「広げる」「深める」「担う」という三つの側面から質の高いインターンシップ等の拡充ならびに担い手の養成を中心とする事業プロジェクトを遂行するものである。

2014年度は、1、2年次生を対象に新たなプログラム「社風発見インターンシップ」を開発・実施し、本学からは4名の学生が参加した。また、連携する11大学の教職員とともにプログラムの開発および実践に取組み、FD・SD研修につなげることができた。目標とするインターンシップ受講生数の拡大に向けて、企業開拓、学生募集、企業と学生のマッチング等、課題の改善に向けた知見を得ることができた。

3 学習支援の取組み

(1) 対面学習支援活動

学生の質問や相談に対して、学習支援指導教員が対面学習や学習方法のアドバイス

を行った。2014年度の利用者数(実人数)は、1,129名(299名)であり、1年次生の44%、2年次生の36%、3年次生の16%、4年次生の7%が利用した。定期試験前やレポート提出前には利用者が急増するため、利用状況には多少の波がある。学生の質問内容は集約し関連する科目の担当教員に連絡し、授業改善に役立てている。

(2) 学習支援のための講座の実施

必修科目「化学基礎」と連動して、定期試験に合わせて基礎力養成講座「化学」を実施した。加えて、担当教員との連携により、成績の十分でない者に対して個別指導をおこなった。また、選択必修科目「エッセンシャル化学Ⅰ、Ⅱ」と連動して、ゲームを通して楽しく化学を学ぶ講座を実施するなど、通常の講義とは一風異なる試みにより、間口を広げるように努めた。

4 バイオ学習ワンダーランド(以下、WLと略す)の運用

(1) WLの利用促進

2014年度入学生から教育プログラムとして編成された新カリキュラムと従来のカリキュラムの両方に対応し、スムーズな運用を行うためにWLの改修と機能改善を行った。入学時ガイダンスでのWLへの初期登録、利用方法の説明、WLクイズ大会を実施し、利用促進を図った。また、教員に向けては新任教員への利用説明、問題登録や小テスト実施のサポートをおこなった。

(2) 出席登録

WLの運用開始から4年目を迎え、全学年においてWLを利用した出席登録を行った。WLを利用して授業の出席状況を管理することにより、修学困難な学生を早期に発見し、迅速に対応することが可能となった。

(3) ポートフォリオ(以下、PFと略す)の指導と支援

学生がPFでふりかえりを行うことによって「学びのサイクル」を身につけ、主体的に学ぶ力を身につけるための指導と支援を行った。1年次生は「大学での学びと実践方法」授業でふりかえりシートを提出、SVがコメント記入後PDFで取り込み、就業力PFで公開した。前期にPFを有効に活用できた学生3人の表彰を行い、PF記入例として、HP上で公開した。後期は、「フララの夢実現道場 2014」を実施し、応募者が目標を達成するためのサポートを行った。

5 入学前教育講座の実施

AO入試、指定校推薦入試、公募制推薦入試の早期入学決定者を対象に、大学での授業を受けるために必要な基礎学力の涵養、学習の継続のため入学前教育講座を实

施した。12月から3月の4日間に英語、数学、化学、生物の講義を行い、68名が参加した。早期入学者に対しては自習用の教材と課題を与え、入学前教育用WLを活用して、入学までの期間の継続的な学習を促した。今年度は新たに、大学の研究室訪問や大学での学び方の講座、在学生との交流ができる機会を設け、大学入学にあたっての様々な不安を解消し、よりスムーズに大学生活のスタートが切れるような内容とした。

6 就業力の強化(就業力支援関連)

(1) キャリア科目の企画・運営

「学生の主体的な学びを確立する教育システムの構築」

学びの場づくりを大学内部の取組から他大学や産業界と連携した取り組みへと段階的に広げ、学びの質を受動的から能動的に段階的に転換する教育システムを構築することを目的としたカリキュラムを地元産業界との連携によって実施した。PBLの充実・改善に向けて【テーマA】PBL部会での取組成果や地元産業界の委員による外部評価委員会の提言を受け、学生の主体的な学びを引き出す本気の場づくりなど授業内容の改善に取り組んだ。2年次「長浜魅力づくりプロジェクト」は、受講者が増え、「長浜人の地の酒づくり」と「脱出ゲーム」の2つのイベントを実施した。

(2) 就業力育成支援体制の充実

学生一人一人がキャリア科目や大学生活全般を通じて就業力を伸ばすことができるように、WLと連動した就業力評価システム・就業力ポートフォリオの運用で学生全体へ働きかけた。個別の学生には、インターンシップ実習に関する相談や学生の自主活動への相談対応などの対面指導を行なった。

(3) 就業力育成を目的とした学生活動支援

教員や関連部署と連携して、就業力育成につながる学生の自主活動を支援した。2014(平成26)年度は、青年会議所ひとづくり委員会が4月から7月に長浜、米原市内の小学校で取組んだ訪問授業「ドリームプロジェクト」に、新入生20人が参加した。自主活動団体「Entrance to Science」の「科学(Science)を通じた地域交流」の取組みは、環びわ湖大学・地域コンソーシアムの「大学地域連携課題解決支援事業2014」に採択され、「環びわ湖大学地域交流フェスタ2014」において、活動奨励賞を受賞した。「iGEM Nagahama」は10月にボストンで開催された合成生物学の世界大会iGEMに学生6人が参加し銀メダルを獲得した。その他、地域からの要請にこたえる小学生向けイベントなど、年間を通して学生が展開した様々な活動を支援し、学生の就業力育成に寄与した。

【6-2】 長浜市内拠点活動

長浜市中心市街地の「町家キャンパス」は、学生が地域との連携を目指す自主活動「町家プロジェクト」など様々な活動の拠点となっている。

2014年度の町家プロジェクトは、以下の活動を通して積極的に地域に貢献した。

- ・ 4月:「曳山祭り」への参加
- ・ 5月:町家キャンパスで地域の方々との交流会を企画し、商店街、商工会議所、青年会議所、曳山祭総当番の方々与学生、教職員が交流
- ・ 7月:「ゆかたまつり」での飲食ブース出展
- ・ 7月～3月:「わーくワーク北小タウン 2014」(7月)、「子ども長浜学」(8月)、「滋賀県ものづくりフェア」(11月)、「環境啓発イベント『環境に優しい日』」(3月)など地域社会からの要請に応じて、小中学生を対象とした科学実験を実施
- ・ 10月:「アートインナガハマ 2014」に参加し、キャップアート・ワークショップを開催

町家プロジェクトのなかで科学に特化した活動を展開するグループ「Entrance to Science」も、11月に長浜市立南中学校の「親子フォーラム」に参加して、7種類の科学実験ワークショップを開いたほか、市民向けの科学講座を町家キャンパスで定期的で開催するなど市民の方々と交流を積極的に進め、地域との信頼関係構築に寄与した。

今年度は、「町家キャンパス」を利用した新たな活動の展開も見られた。6月には岐阜県の中学校の研修を受入れ、町家キャンパスで本学教員による授業をおこなった。また、3月には町家活動に取り組んでいる本学と他大学の学生とが交流し、ワークショップを実施するなど、地域の枠を超えて活動が広がった。

また、「町家キャンパス」は、本学のキャリア教育の拠点ともなっており、「ボランティア活動の意義と実践」、「長浜魅力づくりプロジェクト」など地域の団体や企業と連携して行うPBL型科目の授業は、町家キャンパスで開講している。「ボランティア活動の意義と実践」では、湖北湖東地域の11カ所のしょうがい者授産所やしょうがい者施設で学生が協働体験・介助体験をさせていただいた。「長浜魅力づくりプロジェクト」で今年度実施した「長浜人の地の酒づくり」と「脱出ゲーム」の2つのイベントでは、地域の方々にご協力いただきながら学生が課題に取り組んだ。

【7】 教育・学術情報センター活動

【図書部門】

1 資料の整備

(1) 学術雑誌

2015年1月からの外国雑誌については、委員会で検討した結果、教員へのアンケートを6月に行い、購入タイトルを見直した。大学図書館コンソーシアム連合(JUSTICE)の加盟館に提供される条件で購入することができたこと、オンラインのみに絞ったことで、購読希望

の多いコアジャーナル、コレクションの購読を維持し、例年と同水準のタイトル数を契約することができた。

国内雑誌については、消費税増税の影響により予算を微増したが、新規購読誌は1誌に抑えた。

学会誌など、学内教員が購読している雑誌を寄贈してもらい、最新ではないが、図書室で誰もが閲覧できるよう活用している。

(2) 図書資料

シラバスに掲載されている資料を中心に、テキスト、担当教員指定の最重要図書を通年展示した。教員からの推薦図書については、常時受付可能、随時発注するよう改善し、できる限り迅速に入手するようにした。募集にはグループウェア(desknet'sNEO)も活用し、幅広く全教員に呼びかけた。

教員推薦図書の予算では、英語多読用の資料のシリーズ未購入部分を揃えて、上の段階まで学習を進めていけるよう、充実を図った。

利用者リクエスト件数は増えてきているが、入手可能な資料については、全件に応えてきた。

(3) 視聴覚資料

教員からの講義用資料のリクエスト、シリーズの継続、話題作を中心に購入した。図書室内視聴、講義内での利用、著作権処理済みの資料の館外貸出を実施している。

2 環境の整備

(1) 開館時間の延長

夜間2時間延長開室を行っている。また定期試験期間前と期間中は、試験勉強対策として8時15分から早朝開室を行った。夜間延長時間については、学生アルバイトでの対応とし、アルバイトは、活動資金の補助となるよう、iGEMのメンバーを起用した。早朝開室に関しては、職員が担当し、カウンター業務も行った。

(2) 機関リポジトリの開設

学位規則の一部改正に伴う博士論文のインターネット利用による公表のため、機関リポジトリ「長浜バイオ大学リポジトリ」を開設した。現在、2013年(平成25年)度博士課程後期課程修了生の論文を公表している。

(3) 学習用パソコンの設置

情報実習室が講義で利用されているときに、自習できるパソコンが充分ではなかったため、閲覧席設置の自習用デスクトップパソコンを12台増設し、24台にした。

また、図書室内で利用できるノートパソコンを新たに導入した。ノートパソコンは無線 LAN 環境が必須であるため、図書室周辺に専用のアクセスポイントを 2 台設置し、通信帯域の確保を行った。

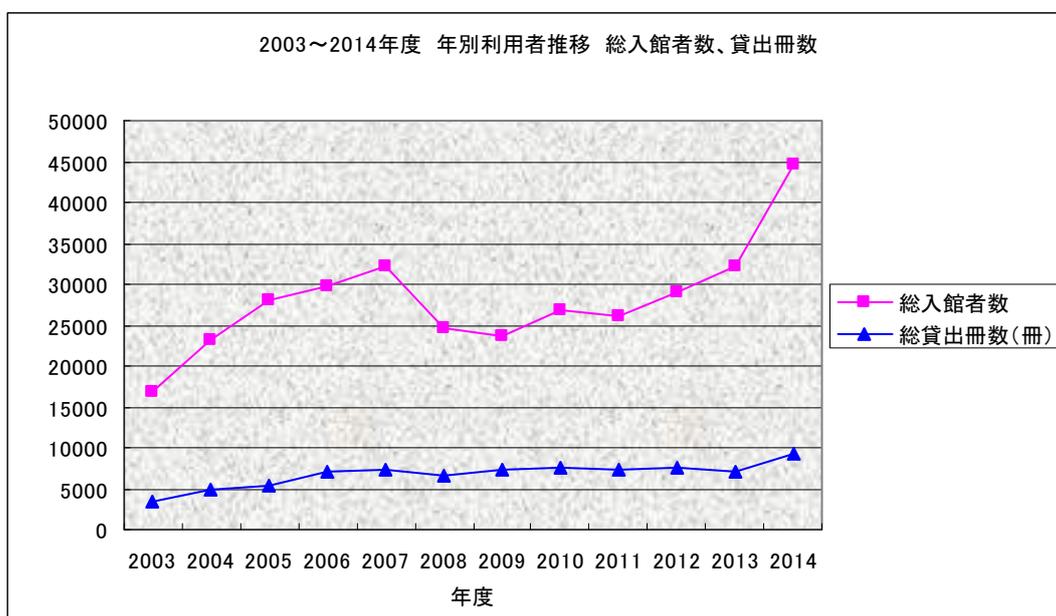
(4) 高速充電ステーションの設置

充電による学内パソコン占有の防止解決策として、2014 年度に新設した携帯端末高速充電ステーションについて、追加して 8 台まで増やした。利用が思いのほか多く、順番待ちの状態だったが、増設により混雑が緩和された。

3 その他

2013 年度より講義「大学での学びと実践方法」の一環として、新入生全員に図書室でのガイダンスを実施している。そのほかの講義内での利用もあり、2014 年度は入館者数、貸出冊数ともに大幅に増加した。(総入館者数 2013 年度 32,091 人→ 2014 年度 44,618 人 / 貸出冊数 2013 年度 7,063 冊→ 2014 年度 9,187 冊)

また、SNS (facebook) を利用した情報発信は、学内者だけでなく、学外への広報となった。現在、116 名の「いいね」登録者と、約 150 人の記事閲覧者がいる(2015 年 4 月現在)。学外者や卒業生の閲覧もあり、図書室を継続的に利用する学外者も出てきた。



【情報部門】

1 無線 LAN 認証システムの導入

2014 年 5 月に、学内無線 LAN の認証環境を再整備し、従来の事前申請(利用申請用紙記入)を不要とし、無線 LAN 利用のハードルを引き下げた。特に、バイオ学習 WL で出席登

録を行う関係上、無線 LAN の利用は全学生が必須であるため、多くの学生が利用申請を行っていたが、この手順が簡略化され事務作業の煩雑さも大幅に解消された。

一方で、利用のハードルが下がったことにより、セキュリティレベルが低下し、無線 LAN 環境の信頼性が低下すれば意味がない。セキュリティと利便性の両方を高いレベルで両立させるため、「認証スイッチ」によるユーザ認証と、WEB フィルタリングソフトを導入した。

ユーザ認証により、本学が発行したアカウントを所持した者だけが無線 LAN を利用することができ、第三者による不正利用を防ぐことができている。また、ユーザ認証画面は、本学の無線 LAN に接続すれば自動で表示されるため、認証画面(右図)を開く手間がない。さらに、ユーザ認証の手順は、Windows や Mac 等のパソコン、iPhone などのスマートフォン、iPad 等のタブレット機器等、機種を問わず共通化されているため、より多くの教職員、学生が無線 LAN を利用するに至っている。

学内無線 LAN の利用者については正確な統計をとることが困難ではあるが、一つの指標として過去 2 日間のアクティブユーザ数(無線認証を行ったユーザ数)がある。2014 年度の後半には、アクティブユーザが 1250 をオーバーしており、本学の在学生全体(学部+大学院)の人数とほぼ同数である。もちろん教職員の利用、非常勤教員の授業内での利用も多くなっている。

セキュリティ対策としては、その他に WEB フィルタリングソフトの[i-Filter]を導入した。学外との通信の多くを占めているものが WEB 通信であるが、一方ではウィルスの配布サイトや、フィッシング詐欺サイト等、セキュリティを脅かすサイトも少なくない。このようなセキュリティ上問題があるサイトへのアクセスを禁止することが、セキュリティ確保の第 1 歩であると認識し、フィルタリングソフトの導入を行った。これは無線 LAN 環境だけではなく、学内すべての WEB 通信に適用し、おもに脅威情報として報告されているサイトへのブロックを行っている。2014 年度の実績として、脅威情報(ウィルス等の配布)とフィッシング詐欺サイトへのブロックが約 60 件発生しており、一定の効果を上げているものと思われる。無線 LAN は、今後も利用端末の増加や、トラフィックの増加が見込まれるため、2014 年度の状況を踏まえて今後の増強計画を立てていきたい。

2 グループウェアの導入

2014 年 8 月、業務効率の改善、大学運営に関わる情報共有を目的として、全学的にグループウェア(デスクネッツネオ)を導入した。グループウェアの導入は、開学以来初めてであり、当初から全機能を提供しても混乱が予想されたことから、まずは「施設予約」機能から開始し、状況を見ながら徐々に利用する機能を増やしている。

ログイン 完了

長浜バイオ大学
無線LAN 利用者認証

ユーザID

パスワード

利用開始 reset

利用終了

利用上の注意：
• 学内PCにログインする時のユーザIDとパスワードが必要です。
• 認証状態は、接続場所・ログイン継続時間によって変わります。この画面が表示されれば、再度認証してください。
• ゲスト用アカウントは、命江館2F 教育学術情報センターのカウンターでお伝え致します。
• その他、学内規定を順守し適切な利用を心がけてください。悪質な利用があった場合は、アカウントの停止を含む罰則を適用します。

3 京都高齢者大学のパソコン講座の運営・サポート

2013 年度に開講した京都高齢者大学のパソコン講座の運営(講師及びアシスタントの派遣)を、昨年度に引き続き実施した。パソコン講座(定員 20 名)は、5 講座全 25 回を開催した。パソコンの使い方の基本や、Word や Excel 等のオフィスソフトの活用方法を指導した。

【8】IR活動

【IR室】

1 授業アンケートの実施

FD活動の一貫として、開学年次から継続して実施している授業アンケートについて、FD委員会との連携の元、IR室が実施・集計を行った。授業アンケートは、バイオサイエンス学部、及びバイオサイエンス研究科のすべての開講科目で実施し、結果については担当教員に返却すると共に、学内 WEB には学生から質問のあった事項について教員からのコメントを付けて公開している。

2 IRコンソーシアム活動

2014 年度に正式に加盟した大学 IR コンソーシアムについて、コンソーシアムで提供される大学間ベンチマークの重要な要素となる「学生調査」を初めて実施した。学生調査は、1 年次調査と上級生調査に分かれており、実施対象とする学生数や実施・回収方法等は大学の方針に委ねられている。

本学では、単科大学であることと、全員が必修となっている実験科目を有していることから、後期の実験科目の第 1 回目にアンケート実施し、コンソーシアムに加盟している他大学と比較して、より回収率の高い学生調査を実施することができた。この回収率の高さを活かし、2015 年度はより精度の高い大学間ベンチマークが期待できる。

対象学年	実施日	アンケート種別	回答対象者数	有効回答件数	回収率	備考
1 年次	10 月 1 日(水)	1 年生アンケート	290	279	96%	自然科学基礎実験(3,4,5 時限目)の授業時間内に実施
2 年次	10 月 3 日(金)	上級生アンケート	278	253	91%	各応用実験(3,4,5 時限目)の授業時間内に実施

3 年次	10 月 2 日(木)	上級生アンケート	251	245	98%	各専門実験 (3,4,5 時限目) の授業時間内 に実施
------	-------------	----------	-----	-----	-----	---------------------------------------

3 調査項目の決定

今後の IR 活動の指針となるべき「IR 室業務ガイドライン」を策定した。ガイドラインでは、IR による評価・分析の範囲として以下の 4 点を重点的に実施することとした。

- (1) 本学を受験した学生と本学に入学した学生の特徴を明らかにするための評価・分析
- (2) 学業に成果を上げている本学の学生の特徴を明らかにするための評価・分析
- (3) 本学に入学し、学業・課外活動など学生生活における学生の満足度を明らかにするための評価・分析
- (4) 本学における進学者の特徴、および就職活動をする学生の特徴を明らかにするための評価・分析

【9】施設設備

1 教育研究施設・教育研究設備の整備

(1) ヒトゲノム情報等のビッグデータ処理が可能な高性能のサーバーに更新

現在の求められている生物情報(ヒトゲノム情報等)の大規模処理に耐えうるサーバーの更新として、文部科学省私立大学研究設備整備費等補助金を受けて、次世代の人材要請に必要とされる実践的生物情報処理に加え、大量データの並行処理や高速並列化プログラミング計算といった多様な計算機環境が実現できる SGI UV2000 (E5-4657Lv2, 12core,2.4GHz-384core/1TBmem モデル: 日本 SGI 株式会社)を導入した。本設備の導入より、実践的なバイオインフォマティクスの課題を用いて、大規模な計算処理を必要とする生物情報学の実習が可能となっている。

(2) グリーンイノベーションハウスの設置

イネ、ダイズ、トマト、タバコなどの強光を必要とする植物の栽培可能な屋外閉鎖型P1P温室、シロイヌナズナなど弱光を必要とする植物の栽培可能な恒温恒湿室、遺伝子の形質転換実験に用いる親植物など非遺伝子組換え植物の栽培可能な網室で構成されるグリーンイノベーションハウス(分子育種温室)を文部科学省私立学校施設整備費補助金(私立大学等改革総合支援事業)を受けて設置した。2014年4月から開始した環境・植物制御プログラムの実習で安全な栽培管理、試験研究まで一連の技術を習得するための場を提供する。

(3) 単離細胞の機能解析可能な次世代セルソーターの更新

動物細胞、植物細胞、酵母細胞、細菌、染色体などある一定以上の大きさを持つ粒子を、表面に発現する分子を基にソーティングして分取し検体として分析でき、検体の成分や機能

解析だけでなく、蛍光標識された検体の分画を高精度に分取することが可能なセルソーター SH800Z (SonyBiotechnology.inc) を購入した。抗がん剤や抗体などの物質による作用を受けた検体を正確に分取することで、それらの物質の作用機序を詳細に検討することも可能となり、本学における多くの研究プロジェクトに寄与している。

2 文部科学省私立大学等教育研究活性化設備整備事業による教育・学習環境の整備

「大学力」の向上のため、全学的な体制での教育の質的転換の取組の中で、取組の実施に必要な施設・設備の整備を、文部科学省私立大学等教育研究活性化設備整備事業として採択され、下記の通り整備を行った。

(1) 高精細カラー印刷機(プリンター)の導入

「新しい教育カリキュラム」運用のため、内容が強化された実験実習や各講義科目に使用する資料(細胞の多重染色画像などの高精細印刷を求められる資料等)を提供し、学生の理解度を高め、シラバスに掲げる各教科の教育目標達成を図るため、印刷・作業効率が高く、低コストで高精細のカラー印刷機(プリンター) ORPHIS を導入した。

(2) 自由利用を目的とした貸出用 PC の購入

学生の自主的な学習における情報収集や、実験・実習に関するレポート作成の環境を整備し、学生の情報活用能力の向上や IT 基礎技術の向上を図るため、教育・学術情報センター図書室に学生貸出用ノートパソコン 15 台を設置した。

(3) 無線 LAN アクセスポイント(学生貸出用ノートパソコン用)の増設

学生貸出用ノートパソコン 15 台分の高速通信にも耐えうるだけの高速通信可能な無線 LAN アクセスポイントを 2 か所設置し、負荷分散と、可用性確保を図った。

【10】長浜バイオ大学保護者会

2012 年 11 月 1 日に発足した「長浜バイオ大学保護者会」は、2014 年度に以下の事業を実施した。

1 保護者会定期総会の開催(2014 年 6 月 8 日)

2 回目となる保護者会定期総会が開催され、139 名の保護者が出席した。

2 保護者懇談会の開催(2014 年 6 月 8 日)

保護者会定期総会に引き続き、大学との共催による保護者懇談会が開催され、239 名の保護者が出席した。全体説明会では、学長による全学的な教育・研究方針の説明、大学院研究科長による大学院教育および JABEE プログラムに関する説明、就職・キャリア担当副機構長による就職に関する説明を実施した。さらに、外部講師による就職活動への親の関わり方をテーマとする講演会が実施された。また、グループ懇談会では、テーマ別に分かれ、質問に対する回答を行う形式で、本学教職員と保護者の懇談が行われた。

3 役員会の開催(2014 年 5 月 10 日、2015 年 2 月 21 日)

役員会を2回開催し、2015年度事業計画・2015年度予算などの審議を行った。

4 助成事業

学生自主活動(iGEM Nagahama など)、留学生との国際交流活動、新入生フレッシュャーズキャンプ実施費用、学生の資格取得費用などに対して助成を行った。

【11】長浜バイオ大学同窓会

本学の同窓会である「命洗会」が昨年設立された。ただし、設立時の会員は本学卒業の教職員を中心にごく限られたメンバーであったため、今年度は卒業生全員に郵送による入会の呼びかけを行うなどの会員拡大に注力した。しかしながら、入会申込者が依然として少なく、本来の活動ができていないのが実状である。本学は活動が軌道に乗るようにサポートを行う。

【12】京都高齢者大学

開校2年目である今年度は10講座を開講した。受講者は158名で昨年度とほぼ同数であった。新規開設した「時事問題」講座は48名が受講し人気が高かった。逆に「長生講座」については、名物講師が体調不良のため途中降板となり、講師および講座内容の変更等を行ったため受講生に迷惑をかけることとなった。

事務局運営では、受講生の中から複数の運営協力者があり活発化した。なお、本学は会場提供、本学教員の講師派遣、運営費補助等の協力を行った。

2015年度 長浜バイオ大学 入学者統計資料(過去3ヶ年)

資料①

2015.4.24 アドミッションセンター

学科名	入試方式	定員			志願者数			受験者数			合格者数			倍率			入学者数		
		15年	14年	13年	15年	14年	13年	15年	14年	13年	15年	14年	13年	15年	14年	13年	15年	14年	13年
バイオサイエンス学科	指定校特別推薦	15	15	15	15	13	15	14	13	15	14	13	15	1.0	1.0	1.0	14	13	15
	一般公募制推薦ABC	33	28	28	222	269	258	216	269	254	191	177	181	1.1	1.5	1.4	47	41	43
	AO(理科実験評価型)入試	5	8	8	11	14	13	11	14	13	8	13	10	1.4	1.1	1.3	8	12	10
	前期AB・前期ABプラスセンター1	50	50	49	659	819	552	645	776	540	309	252	241	2.1	3.1	2.2	66	44	71
	中期・中期プラスセンター2	15	17	15	143	146	140	140	141	140	66	50	56	2.1	2.8	2.5	24	21	27
	後期	5	5	5	55	52	91	48	49	89	42	37	5	1.1	1.3	17.8	21	28	4
	センター利用 前期AB	20	20	20	179	262	191	179	262	191	90	90	113	2.0	2.9	1.7	8	15	19
	センター利用 中期	5	5	5	13	26	15	13	26	15	7	13	7	1.9	2.0	2.1	2	2	4
	センター利用 後期	-	-	3	-	-	23	-	-	23	-	-	1	-	-	23.0	-	-	0
	社会人	若干名(上記に含む)			0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	0	0	0
	留学生	若干名(上記に含む)			2	5	5	2	5	5	2	4	4	1.0	1.3	1.2	1	4	2
計	148	148	148	1,299	1,606	1,303	1,268	1,555	1,285	729	649	633	1.7	2.4	2.0	191	180	195	

アニマルバイオサイエンス学科	指定校特別推薦	2	2	2	4	11	5	4	11	5	4	11	5	1.0	1.0	1.0	4	11	5
	一般公募制推薦ABC	12	10	10	92	122	109	90	122	109	81	61	74	1.1	2.0	1.5	15	13	19
	AO(理科実験評価型)入試	2	2	2	2	5	6	2	5	6	2	5	5	1.0	1.0	1.2	2	5	5
	前期AB・前期ABプラスセンター1	17	17	16	312	366	242	309	357	238	143	110	95	2.2	3.2	2.5	18	27	15
	中期・中期プラスセンター2	5	5	5	54	65	51	54	64	49	32	10	19	1.7	6.4	2.6	8	4	10
	後期	2	2	2	21	30	39	19	27	39	19	3	2	1.0	9.0	19.5	5	1	2
	センター利用 前期AB	8	10	10	62	80	67	62	80	67	27	12	37	2.3	6.7	1.8	3	1	6
	センター利用 中期	2	2	2	1	12	4	1	12	4	0	4	2	-	3.0	2.0	0	0	0
	センター利用 後期	-	-	1	-	-	7	-	-	7	-	-	0	-	-	-	-	-	0
	社会人	若干名(上記に含む)			0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	0	0	0
	留学生	若干名(上記に含む)			1	3	1	0	3	1	0	2	1	-	1.5	1.0	0	0	1
計	50	50	50	549	694	531	541	681	525	308	218	240	1.8	3.1	2.2	55	62	63	

コンピューターバイオサイエンス学科	指定校特別推薦	2	2	2	7	7	8	7	7	8	7	7	8	1.0	1.0	1.0	7	7	8
	一般公募制推薦ABC	10	8	8	59	76	69	59	76	69	54	66	55	1.1	1.2	1.3	2	12	7
	AO(理科実験評価型)入試	2	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	0	0	0
	前期AB・前期ABプラスセンター1	13	13	12	135	195	138	132	191	130	110	107	87	1.2	1.8	1.5	17	19	14
	中期・中期プラスセンター2	3	5	5	42	53	45	42	51	43	35	15	23	1.2	3.4	1.9	5	3	10
	後期	2	2	2	13	27	31	12	25	31	12	12	3	1.0	2.1	10.3	2	3	0
	センター利用 前期AB	6	6	6	27	35	30	27	35	30	22	19	19	1.2	1.8	1.6	4	4	1
	センター利用 中期	2	2	2	1	11	1	1	11	1	0	4	0	-	2.8	-	0	2	0
	センター利用 後期	-	-	1	-	-	5	-	-	5	-	-	0	-	-	-	-	-	0
	社会人	若干名(上記に含む)			0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	0	0	0
	留学生	若干名(上記に含む)			0	0	1	0	0	1	0	0	1	-	-	1.0	0	0	1
計	40	40	40	284	404	328	280	396	318	240	230	196	1.2	1.7	1.6	37	50	41	

学部計	238	238	238	2,132	2,704	2,162	2,089	2,632	2,128	1,277	1,097	1,069	1.6	2.4	1.9	283	292	299
-----	-----	-----	-----	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-----	-----	-----	-----	-----	-----

博士課程前期課程	学内	36	36	36	64	52	64	62	50	62	54	44	54	1.1	1.1	1.1	44	25	42
	一般・留学生・社会人				8	8	6	8	7	6	3	2	2	2.7	3.5	3.0	3	2	2
博士課程後期課程	学内	5	5	5	6	7	2	6	7	2	6	7	2	1.0	1.0	1.0	6	6	2
	一般・留学生・社会人				1	0	2	1	0	2	1	0	2	1.0	-	1.0	1	0	2